

8 高原野菜産地での堆肥利用推進の取り組み

～ 堆肥の有効活用を目指して～

情報提供：吾妻農業事務所普及指導課

活動の背景

長野原管内には、嬭恋村や長野原町の高原地帯にキャベツをはじめとする大規模露地野菜産地があり、北軽井沢地区に大規模酪農地帯を抱えている。これまで、高原野菜産地への堆肥利用推進の取り組みとして、キャベツ栽培における牛ふん堆肥の連続施用展示ほを設置したり、堆肥利用に向けた講習会や視察等を行い、啓発を図って来た。

平成20年の7月より肥料価格が大幅に上昇するなど、先行きが見えない状況となったため、土壌改良剤や部分的な肥料代替として堆肥の一層の利用推進を図った。

普及活動の経過

平成19年に、北軽井沢地区の酪農家の協力により、7名(4 ha)の野菜生産者が堆肥散布を行い、20年産キャベツの生育経過を観察した。また、堆肥利用に向けて JA 嬭恋村田代青年部を対象とした講習会や農家が建設した堆肥舎の視察を行った。

現在、JA や農業技術センター等の関係機関と連携しながら、高原露地野菜の施肥基準の見直し、減肥の可能性検討、畜産試験場で開発された堆肥施用量計算ソフトの高冷地版作成に向けた検討を始めている。



マニユアスプレッダを用いた堆肥散布



農家手製の堆肥舎で堆肥をブレンド

普及活動の成果

北軽井沢地区の露地野菜農家では、近隣地域からの家畜ふんを原料に自家製堆肥作成の取り組みが積極的に行われている。一部の生産者は、堆肥を土壌の物理性改善や地力維持の目的だけでなく、肥料や土壌改良剤として代替している生産者もあり、肥料費の低減につなげている。

技術のポイント

- ・ 大規模露地野菜地域において、化学肥料の代替として家畜ふん堆肥を活用するには、肥料成分の安定した堆肥の作成(または購入)と積み込み散布機械を用いた堆肥施用作業体系の構築が前提になる。
- ・ 堆肥に含まれる肥料成分を活用した施肥設計を組むために、標高1000m地帯で利用可能な「高冷地版堆肥施用量計算ソフト」の開発が急がれる。